

「人生100年時代」を生き抜く資質・能力を育成するキャリア教育の推進 ～ ふるさとを想いグローバルな視野で考え、自立し共生する生徒の育成 ～

北海道平取高等学校
学 級 数 3
(校長 菅原 雅之)

I 実践テーマの設定の理由

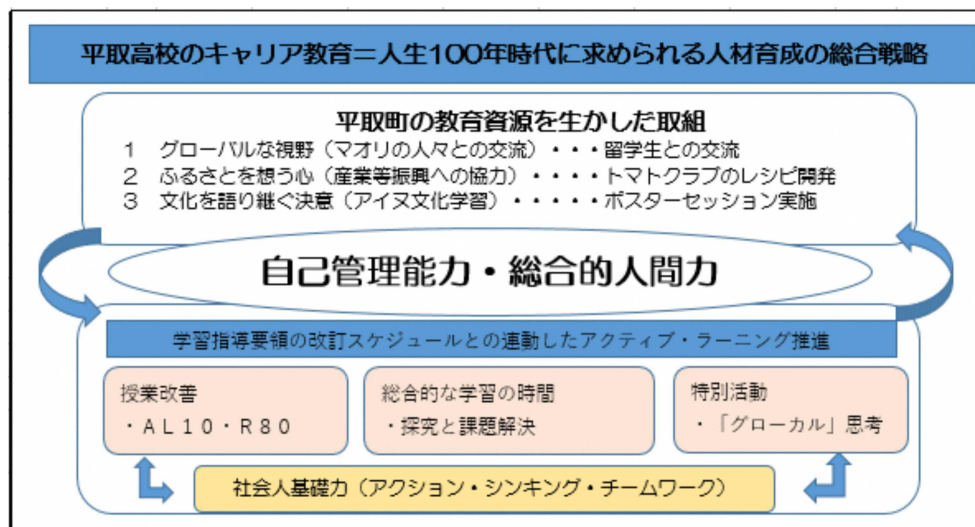
本道が「北海道」と命名されて150年という節目の年である。先人が積み重ねた歴史を振り返り、託された貴重な財産を受け継ぎ、新しい価値を創造しながら未来に引き継いでいく責務が教員にも生徒にもある。ただし、これからの社会は、人工知能やAI、ドローンの多方面の活用などの技術革新や、新たなビジネスモデルの出現により、大きく変化することが予想される。そのような未来で生きていく生徒には、「ふるさとを想う心」や「グローバルな視野」、「100年の人生を生きる方策」、人口が減少していく北海道において「歴史や文化を伝えていく資質と決意」等が求められる。

これらのねらいを達成するためには、教育活動に大きなイベントを1つ組み込むより、日常の授業・学校行事・ボランティア活動などの質を上げていくことが近道であるように思う。つまり、それぞれ活動において「目標の設定」や「指導内容・指導方法」の工夫を繰り返し、教育活動の質を高めることである。そのためには、学習指導要領と北海道教育推進計画に基づいて、教育活動を見直すという原点に戻ること必須である。なお、2021年度末までの学習指導要領の先行実施までの4年間において、適切なカリキュラム・マネジメントを推進するには、教職員が「society5.0（超スマート社会）」について見識を深める研修を進める必要もある。

また、同時に、生徒や保護者の学校に対する満足度を高めることも考えていきたい。毎年実施している学校評価保護者アンケートは、質問項目（資料1）について、4段階評価（「思う・おおむね思う・あまり思わない・思わない」）としている。平成29年度の2月における調査では、「思う・おおむね思う」を合計すると良好な結果であると考えが、「思う」のみに着目すると保護者の評価は決して高くない。このことを受けて、資料2のように実践研究の要点を整理した。

2018年から2020年までの学習指導要領改訂スケジュールの進行管理を踏まえ、生徒の達成感や

保護者の満足度を高めながら、教科・科目、総合的な学習の時間等で、多くの成果を上げるためには、日々の教育活動の質を向上させることが、カリキュラム・マネジメントの1つの「定跡」であると考えている。



II 実践の概要

(1) アクティブ・ラーニングの推進

年度当初から新学習指導要領の趣旨について、職員会議や校内研修、朝の打合せ、各分掌会議等で理解を深め、「言語活動の充実」の延長線上に「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められていることを確認した。なお、研修のなかでは、「主体的・対話的で深い学び」とアクティブ・ラーニングとのそれぞれの示す範囲や内容、相違等について議論し、認識を深めることもできた。また、先進校の事例として、茨城県立並木中等教育学校の「AL指数」と「R80」の実践を学びながら、本校においても各教科ごと「AL指数」を定めた取組を進めることとなった。

また、校内研修や部長主任会議等で、「学校教育目標は抽象的で、ここから育成すべき資質・能力を教員の共通理解とすることは困難」との意見等があり、育成すべき資質・能力を整理することが、カリキュラム・マネジメントの1つとして掲げられた。管理職からは、整理する際の方向性として、「育成を目指す力＝自己管理能力、総合的人間力、社会人基礎力」が示された（資料3）。最終的に7月に「平取高校で育成する資質・能力『人生100年時代』を生き抜く資質・能力」としてまとめられた（資料4）。なお、これは2020年までの学習指導要領改訂スケジュールの進行に従い、今後も検討を加えながら、見直しや書き直しをすることも共通した認識となっている。

(2) キャリア教育の全体計画の練り直し

数年前から「進路状況」、「進路決定の過程」、「資料編」の3部構成の「Reborn *はじまりの一步*」という冊子を作成し、ホームルームや総合的な学習に時間において、進路学習の材料として活用している。内容と構成は多くの高校で作成されている進路資料と大差はない。ただし、生徒自身が、未来の社会において身に付けておくべき資質・能力について理解するべきであるが、そのことについては記述がない。また、進路決定と同時にライフプランやキャリアプランを考えることについての記述もない。これらのことについて、今後、教員研修を進めながら、進路指導資料の内容に追加することとした。なお、教員がsociety5.0等について、見識を深める研修をせずに進路指導を進めることは危

資料1 【平成29年度 保護者 学校評価アンケート結果】

- | | | |
|---------------------------|--------|------------|
| (1) 宿題は家庭学習の定着につながっている。 | 思う－11% | おおむね思う－55% |
| (2) 進路希望に添った選択科目が設置されている。 | 思う－8% | おおむね思う－77% |
| (3) 指導方法の工夫など授業改善がなされている。 | 思う－5% | おおむね思う－72% |
| (4) 個に応じた細かな学習指導がなされている。 | 思う－8% | おおむね思う－72% |
| (5) 学校行事等で社会性をはぐくんでいる。 | 思う－11% | おおむね思う－80% |

資料2 【実践研究の推進の全体像】

- (1) 研究課題の把握と研究主題の設定
 - ア 自己評価、学校関係者評価等による課題の把握
 - イ 管理職による各教育活動の実態把握と分析
- (2) 研究仮説の設定
 - ア 育成する資質・能力を明文化することにより、課題意識を高めることができるだろう。
 - イ 授業や特別活動等のねらいを明確にすることにより、アクティブ・ラーニングを意識した学習活動になるだろう。
 - ウ 生徒の振り返る力を高め、評価方法を工夫することにより、キャリアにかかる諸能力を身に付けさせることができるだろう。
- (3) 研究内容の構想
 - ア アクティブ・ラーニング指数の導入（数値目標の設定「AL10」）
 - イ 学び直し教材の活用（オンデマンド教材の活用による家庭学習の定着）
 - ウ 総合的な学習の時間の内容の検討（アイヌ文化学習のポスターセッション）
- (4) 検証の計画
 - ア 平成30～32年度の学校評価アンケート（保護者、生徒）
 - イ 学校評議委員会、PTA役員会での聞き取り調査、討論
 - ウ マネジメント・サイクル等を活用した年度末反省

険である。どのような資質・能力を育成するかを議論して、教員の共通認識とした、育成すべき「資質・能力」をキャリア教育を担当する教員の指導計画や実践の下地にしておく必要がある。年度当初、教職員が学校教育目標の趣旨を正確に把握していないことが問題となったが、学校教育目標が頭に入っていない状態で、生徒一人一人のキャリア発達にかかる資質・能力を伸長することはできない（資料5）。

資料3 朝の打ち合わせを活用した『ミニ研修』の様子

第1回(5月28日)・・・新学習指導要領の各教科の目標が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間力等」の3つの柱で整理して記述されていることの確認。
第2回(5月31日)・・・育成すべき資質・能力を明確にしてアクティブ・ラーニングを推進することや「資質・能力の育成＝内容理解＋未来を切り拓く学び」であることを確認。
第3回(6月5日)・・・静内高校などの研究先進校の「学校教育目標と育成を目指す資質・能力の関連づけ」を手本とすることを確認。



○ 学校教育目標で育成を目指す資質・能力を3項目に整理

【平取高校 学校教育目標】

- ・一人一人の可能性を伸ばす教育
- ・礼儀正しい情操豊かな人間形成を目指す教育
- ・充実した気力と強靱な体力を養う教育



簡素化

【育成を目指す力】

- ・自己管理能力
- ・総合的人間力
- ・社会人基礎力

資料5 進路指導資料の改訂

「Re-born」の内容構成

- 1 卒業生の進路状況の概要
- 2 進学状況、就職者の状況
- 3 進路指導計画
- 4 3年間の進路学習の流れ
- 5 模擬試験について
- 6 採用・入学試験のスケジュール
- 7 合格体験記
- 8 進路行事記録シート



早急な内容の改訂

【追加する内容】

- ア 身に付ける資質・能力
 - イ ライフプランとキャリアプラン
 - ウ 社会貢献と地域貢献
- ※ これまでの資料は、進路決定に関連する全体計画が中心であり、社会人に必要な資質・能力について書かれた読み物資料が不足していた。よって社会貢献等の読み物資料を追加する。

資料4 平取高校で育成する資質・能力＝「人生100年時代を生き抜く資質・能力」

1 可能性を伸ばす力 (B brave bright)

- ・日本語能力
- ・英語力
- ・ICT活用能力
- ・思考力
- ・分析力
- ・表現力
- ・自己を肯定する力
- ・学びに向かう力
- ・リーダーシップ

2 地域に貢献する力 (R regional contribution force)

- ・地域の文化やスポーツの振興に寄与しようとする意欲
- ・地域の環境保全やボランティア活動に参加しようとする意欲

3 アイディアを仕事に活用する力 (T try amazing new idea →task management)

- ・新しいアイディアを生み出す能力
- ・新しいアイディアを仕事に活かそうとする意欲

4 周りの人たちを幸福にする力 (R reliable ・ respect)

- ・感謝する心
- ・よい人間関係を形成しようとする意欲
- ・状況を把握する力
- ・ストレスをコントロールする力
- ・社会のために自己の能力や体力、時間を使おうとする心構え

(3) アイヌ文化学習の工夫・改善

「義務教育段階で学んできたアイヌ文化学習をもとにして、新たにテーマを設定して探究したことを成果物として残すこと」を到達点とし、探究学習とポスターセッションを行った。今年度は11月7日(水)、11月21日(水)、11月28日(水)にそれぞれ2時間ずつ計6時間の探究学習を実施した(1年生24名、2年生15名の合同の授業として実施)。第1回目の11月7日は、平取町立二風谷アイヌ文化博物館の関根健司氏に「アイヌの人々の神の考え方」・「イオマンテ(熊の霊送り)」の講話をお願いし、小学校や中学校で学んできたアイヌ文化や伝統等について総括的な学習をした。第2回目の11月21日は、プレゼンテーション資料の作成をグループごとに行い、11月28日の第3回目は、各グループがポスターセッションを行った(1グループ3名での取組。事前に、衣食住に関するテーマ設定、言語や舞踊、文様に関するテーマ設定などを例示)。今回の取組は、小学校段階からアイヌ文化には触れてはいるが、成果物として残す取組は中学校において経験していない。アイヌ文化のなかのある事象をとらえて咀嚼し、自分の中に知識や理解として置き換えて、発表するためのポスターを作成して説明するという、「社会に発信する力を身に付けながら、それを探究学習の成果物として残す」という取組である。また、成果物の内容に誤りがないかなどを地域の人々から指摘していただいたり、アイヌ文化やアイヌの人たちの伝統について、異なる解釈を提示してもらうこと等も、ふるさと学習としてのねらいとしている。なお、プレゼンテーション資料を日本語版・英語版で2種類作成したグループもあるなど工夫も見られた。

また、放課後の時間を使い完成させるなど、意欲的な取組姿勢も見られた。ポスターセッションという発表学習であるが、そこには「思考力・判断力・表現力」を凝縮させることができ、アイヌ文化についての自らの思いや経験を思い返し、どの部分をどんな形で主張として切り取っていくのかを判断し、

自分なりの表現でクラスメイトに対し発表することができた。学習指導要領が目指すアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善につながる取組になったと考える。

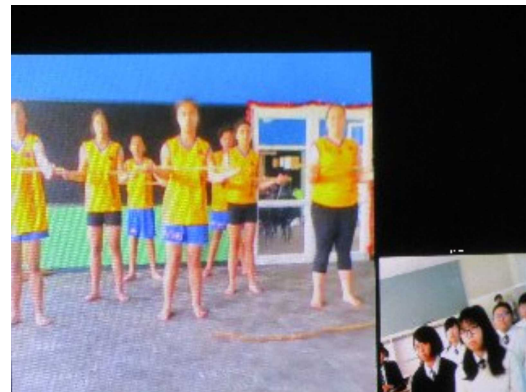
ポスター「衣食住について」(英語版)



発表の様子



「マオリの武術を鑑賞」(スカイプ授業)



(4) 国際理解教育の工夫・改善 (国際交流 (留学生受け入れ))

平取町教育委員会では、「町内の子どもたちの国際交流を進めながら、平取高校の魅力化を進めること」を施策の1つに掲げており、今年度、本校は町教委と連携して4名の留学生を受け入れた。

本校の国際交流は、「異なる文化や外国人との触れ合いを深める機会とし、英語等を活用したコミュニケーションへの関心や意欲を高める教育活動を推進するとともに、マオリの人たちやアイヌの人たちの歴史・文化等を正しく理解しようとする意欲・態度を高め、異なる文化を総合的に理解する資質・能力を育成すること」をねらいとしている。なお、昨年度、本校1年生2名が、ニュージーランドのタフィウアウ校へ3ヵ月の短期留学をしており、今年度は、タフィウアウ校からの留学生を、平成30年10月1日(月)から12月7日(金)まで受け入れ、ニュージーランドやマオリの人々の文化伝統を知る

機会となった。英語の授業では先方の学校とスカイプで繋ぎ、英語・日本語・マオリ語・アイヌ語を織り混ぜた授業を3回実施した。

(5) 学び直しの工夫・改善（オンデマンド教材の活用）

昨年度から、オンデマンド教材の活用を推進している。語彙力を向上させる週末課題や数学や簿記の基礎問題等をアップしておき、生徒が放課後や自宅でスマートフォンを使い学習する。紙ベースの学習に比べて手軽に復習することができるので取組への心理的ハードルが低いことから、数多くの問題に取り組む生徒もいる。ただ、モチベーションの持続が難しく取組状況の悪い生徒も多い。LMS機能は学習状況の管理の即時性・客観性が優れているので、取組の良い生徒に対しても取組が浅い生徒に対しても個別指導の材料として活用できるが、動機付けが重要で、各種のインセンティブを工夫する必要がある。また、いくつかの学力層に対応する課題を準備できるが、個別の指導にふさわしい課題の準備は不可能である。よって、効果はあるが、学び直し・家庭学習への動機付けの方法としては万能ではない。

資料6 タブレット・PC・スマートフォンを利用した学び直し

【成果】

- ① 学習を開始するストレスが軽減されるので気軽できることから、家庭学習の習慣づけに効果があった。
- ② LMS機能は学習状況管理の即時性・客観性に優れており、個別指導に活用することができた。

【課題】

- ① スマホなどの新しい道具に関心は高いが、学習継続のモチベーションの持続が難しい。「動機付け」について絶えず工夫が求められる。
- ② いくつかの学力層の課題を準備できるが、すべての生徒の個別の指導にふさわしい課題の準備は困難である。

III 実践研究の成果

テーマ説明の繰り返しになるが、「北海道においては、未来と地域を担う人材育成が大きな課題」である。そのためには、郷土への理解と愛着を深める教育活動を、1つでも多く実践することが高校教育に求められている。さらに地域の経済発展のためには、グローバルな視点で地域経済の課題について理解を深めることが必要とされ、また、地域の産品を輸出するビジネスモデルの考案や、外国人と積極的にコミュニケーションを図って交流できる英語力の育成なども急務である。本校のような地域から数多くの期待を寄せられ、同時に多くの物心両面の支援を受けている学校は、「地域に貢献する人材の育成」を最大の目標として与えられている。生徒の中にも高校入学時点からすでに、地元で就職して地域に貢献することを目指す者も多い。よって、本校のキャリア教育には、ふるさと学習・地域経済活性化・地域のリーダー育成等を要素として含めることが確定している。つまり、「キャリア教育」＝「未来と地域を担う人材育成」である。ただし、地域社会を担う人材育成は時間がかかる。高校だけの取り組みでは不十分である。小学校中学校と連携することが必要で、その連携の中心となることは、高校で育成する資質・能力を小学校と中学校に理解してもらうことと考える。

資料7 まとめ

【実践研究の到達点】

- ① 学校教育目標が絵に描いた餅にしないために、育成すべき資質・能力を教科・科目や特別活動、総合的な学習の時間のねらいとできるように、具体的な内容や事項に適宜、書き直す必要がある。なお、「資質・能力」をキーワード化すると教員の日常の教育活動の共通目的となり、すべての教育活動が統合され、学校教育目標の達成に近づくことになる。
- ② 社会の変化にともなって、キャリア教育も大きく変わらざるを得ない。多くのキャリア発達上の課題を達成するために、学校内のシステムづくりとともに、キャリア発達を達成した教員を育成する必要がある。そのためには、校内研修に「社会貢献・地域貢献」や「未来社会」、「メタ認知」など、従来の校内研修とは違うテーマを取り入れる必要がある。

【次年度以降の課題】

- ① 新学習指導要領の趣旨の理解を一層深め、「未来に求められる学び」と「社会貢献・地域貢献」を教員一同で組織的に学習し、キャリア教育のシステムの質を上げたり、キャリア教育の内容等を再構築していく必要がある。
- ② 地域社会を担う人材の育成は小中学校と高校が連携しなければならない。そのために、高校におけるキャリア教育のシステムの再構築と育成する資質・能力を地域に理解してもらうよう働きかける必要がある。